「反直観的なもの」としての超自然
―パスカル・ボイヤーの宗教論の幻想文学への適用可能性―

岩　松　正　洋

要　旨

文学理論家ツヴェタン・トドロフは文学における幻想の第一要件を、できごとの自然的な説明と超自然的な説明とのあいだでの「ためらい」に置いた。この指摘は物語の構造論としては正確だが、不条理小説における超自然と、SF 小説における特異だが外挿可能な状況との相違が説明できない。本稿では認知科学者パスカル・ボイヤー（ボワイエ）の超自然論を参照し、物語における超自然を人間学的な角度から規定する。

キーワード：幻想文学（the fantastic）、物語論（narratology）、認知科学（cognitive science）、不条理（the absurd）、SF（science fiction）

I　トドロフの幻想文学論

ブルガリア出身のフランスの文学理論家・批評家ツヴェタン・トドロフの『幻想文学論序説』は、いまなお幻想文学論の最重要文献であり、これに言及せずして幻想文学やその他の非リアリズム小説を論じることはできない。

トドロフは文学における幻想の第一要件を、「まず本文が読者をして、登場人物の世界を生身の人間の世界と見なさしめ、言及したできごとの自然的な説明と超自然的な説明とのあいだでためらわしめなければならない」（Todorov 1970, 37）とした。ここでいう読者とは、生身の個々の読者ではなく、コミュニケーションにおけるヴェクトルの向き先としての「内包された読者」のことである。また自然的な説明とは幻覚や夢、トリックなどであり、

超自然的な説明とは幽霊や悪魔、魔法や超能力などをさす。

トドロフはこのように「幻想」を定義したのち、いくつもの例を分析し、これが19世紀なリアリズムへの信頼を必要とする現象であると結論づけた。幻想はリアリズムに依存しながらそれを裏切る。ヌーヴォーロマンの小説家で文学理論家でもあるジャン・リカルドゥが言うように、「伝統的（あるいはリアリズム的）な幻想」が「文学のリアリズムの正体を暴くことを可能にする」のは、それがリアリズムに「反対するがゆえにではなく、似ているがゆえ」である（Ricardou 1978, pp. 185-186）。

トドロフはこの著作の最終章で、幻想小説が19世紀リアリズムにいわば寄生していたという事態を指摘し、これを「現実と非現実という言語上の対立に基盤を置くこの文学変種」（Todorov 1970, p. 176）と呼んだ。そしてゴーゴリの『鼻』（1836）やカフカの『変身』（1915）において、登場人物が（そして内包された読者もまた）できごとの自然的説明と超自然的説明とのあいだでもはやためらわないという事態（pp. 177-180）を、ロバート・シェクリーの『地球巡礼』（1957）所収の短篇 SF 小説「肉体」「廃品処理サーヴィス会社」の状況に等しいものと論じた（pp. 180-181）。

トドロフのこの指摘は、作中人物や内包された読者が作中の超自然をどう遇するかという点においては正確な把握であり、非リアリズム小説の理論的研究においてあきらかな前進であった。しかしいっぽうで、不条理小説における超自然と、SF 小説における特異な（しかし外挿可能な）状況との相違は、依然として説明されぬまま残っている。

本稿ではフランス出身の人類学者で認知科学者でもあるパスカル・ボイヤー[1]の超自然論を参照し、物語における超自然を人間学的な角度から規定してみたい。

1） ボワイエと読むが、英語圏で活躍しているためボイヤーと呼ばれることが多い。本人もボイヤーと称しているため、この表記を使用する。

II　パスカル・ボイヤーの「心的百科事典」と「テンプレート」[2)]

ボイヤーの『宗教の説明』[3)] は、米国版の副題を「進化における宗教的思考の起源」、英国版（本稿ではこちらを参照する）の副題を「神・精霊・祖先を作り出す人間の本能」と言うだけあって、進化論、とりわけ進化心理学の発想を援用して宗教という文化・行為・観念に宗教や神の概念を解明しようとした著作である。

ボイヤーが著書で目的としているのは、宗教を自然現象として解き明かすことにある。進化心理学で主張されているように、宗教とは、道徳や芸術や遊戯といった文化事象と同じように、人間という動物が進化をつうじて獲得してきた認知機能の動きに随伴して残存する、観念・思考法の多様な集合体だ、ということができる。

ここでボイヤーは手はじめに、人間の意識が「具体的な概念」（猫・桜・電話機・鋸など）と、抽象的な概念である「存在カテゴリー」（人・動物・植物・道具・数など）を区別するという点を指摘する（Boyer 2002, p. 69）。

そのうえでボイヤーは、人間が新しい概念を受け取ったときに、文脈から推論してどの「存在カテゴリー」にその概念を分類するかを決定する、と主張している。

さらにボイヤーは、人間の意識のなかに、「心的百科事典」があると想定した。たとえば「zygoon はハイエナの唯一の捕食者である」「thrickler は高価だが、家具職人には木材加工用に必要なものだ」（p. 66）という文が与えられたとき、人はみずからの「心的百科事典」のなかに、zygoon および thrickler という記載事項が作られる。

2）　本稿第 2 節以降は、拙稿「超自然の作りかた。」（『ハヤカワミステリマガジン』2016年11月号）および「超自然はどのように構成されているか。」（同2017年 1 月号）に簡易な形で素描したものを原型としている。

3）　鈴木光太郎＋中村潔による日本語訳は『神はなぜいるのか？』（NTT 出版《叢書コムニス》、2008）。

言語意識には〈百科事典〉がある、という、という考えかたは、直接的にはおそらく人類学者・認知科学者のダン・スペルベルと英国の哲学者ディアドリ・ウィルソンの『関連性理論　伝達と認知』由来だろう。関連性理論においては、記憶中の概念上のアドレスには論理的記載事項・百科事典的記載事項。語彙的記載事項の 3 タイプの情報が置かれている。

「ひとつの概念の論理的記載事項は、その概念が構成要素となっている論理形式に適用される演繹規則の集合から構成されている。百科事典的記載事項には、その概念の外延および／あるいは表示義にかんする情報、つまりその概念の実例となるモノ・コト・属性の少なくともひとつにかんする情報が含まれている。語彙的記載事項には、その概念の自然言語上の対応物、つまりその概念をあらわす自然言語の単語や句が含まれている」(Sperber and Wilson 1986/1995)

さらに古くは、イタリアの記号学者で小説家のウンベルト・エーコもその記号論体系において、3 世紀の哲学者テュロスのポルピュリオスや19世紀米国の哲学者 C・S・パース、現代の言語哲学者ジェロルド・カッツや認知科学者ジェリー・A・フォダーらを参照しながら「百科事典」いう言語意識を想定している (Eco 1979, pp. 25 & 62)。

エーコは「辞典 vs 百科事典の区別」(1984a, p. 70) を論じ、たとえば「理論的純粋さの観点からは、われわれはすべての百科事典的標識を換喩的標識として、また、提議されたすべての概念的標識や、辞典的標識を提喩的標識として規定しなければならない」(p. 137) と述べている。

「辞典と百科事典は、われわれの記号意識の形態を記述しようとする、二つの抽象モデルである。あえていえば、辞典が自らに課している理想は、この知識をもっぱら言語的な表現で記述することであるし、他方、百科事典は世界についてのわれわれの知識をも説明しようと欲する」(Eco 1973/1988, p. 127)

またべつの箇所では「迷宮としての百科事典」(1984b, p. 156) と「道具としての辞典」(p. 163) というような対比もおこなっている。

エーコの記号論体系においても、スペルベルとウィルソンの関連性理論においても、辞書（「辞典」「語彙」）が文法的・語法的知識を含んでいるのにたいし、「百科事典」には世界についての知識が格納されている。しかしボイヤーの「心的百科事典」には新しく明言された特徴がある。ボイヤーにあっては、その百科事典は独立した知識の集積ではなく、「テンプレート」というものが機能することによって、それらの知識が構造化されている。そしてそのテンプレートは、「存在カテゴリー」に依拠している。

「存在カテゴリー」には「動物」「道具」「人」「数」などの抽象的な概念が含まれる。これらはそれぞれ「テンプレート」を持っている。たとえば｛動物｝テンプレートというものがあるおかげで、「ある雌鶏が卵を産むのであれば、雌鶏一般が卵を産むのはおそらくほんとうのことだ、ということを子どもに言ってあげる必要はない。同様に、一頭のセイウチが赤ちゃんを産むのであれば他のセイウチたちも同じ方法で繁殖するだろうということは、5歳児にもわかる」（Boyer 2002, 47）。

「虎一頭を解剖して内臓を調べたなら、そこに見られるものはべつの虎にもある、とわれわれは考える」（70）。この期待は、経験から得られた結果ではない。つまりこう考えるために、「膨大な数の虎を解剖して、内部にあるものの統計を取ってから、内臓諸器官は｛虎｝カテゴリーの全構成員においておそらく似たようなものだろうと結論づける必要はない」。

さらに人間は、「推論」によって「手持ちの事実どうしのあいだにあらゆる種類の因果の結びつきを作る」。「虎が山羊を食べるのは空腹だからだとか、虎が空腹なのは生存に食料が必要だからだとか、虎が象でなくて山羊を襲うのは極度に大きい動物を殺せないからだとか、虎が草でなくて山羊を食べるのは虎の消化器が草をうまく消化できないからだとかいったことを仮定する」。

さて、見知らぬ語を含む文、

「zygoon はハイエナの唯一の捕食者である」

「thrickler は高価だが、家具職人には木材加工用に必要なものだ」

といった文を与えられたとしたら、人はどう考えるだろうか。

人はこれらの文を読んで zygoon が｛動物｝、thrickler が｛道具｝であると推論する。そして zygoon に心的百科事典の｛動物｝テンプレートを適用し、「zygoon は作ることはできない。zygoon はべつの zygoon から生まれる」「zygoon はふたつに切るとおそらく死ぬ」「zygoon は生存のために食べねばならない」（p. 67）といった推論をおこなう。また thrickler には｛道具｝テンプレートを適用して、電話機やドライバーやバイクと同様に thrickler も「成長したり食べたり眠ったりしえない」（p. 68）ものとして推論する。

与えられた文章をもとにおこなわれる第 1 段階の推論は、与えられた概念にどのテンプレートを適用するかを決定する（｛人物｝か、｛動物｝か、｛植物｝か、｛自然物｝か、｛道具｝か……）。二段階目の推論は、適応されたテンプレートから条件を流しこむという自動的なプロセスであり、これは「初期設定推論（デフォルト）」（p. 69）と呼ばれる。

この推論は人に「期待」を持たせる。じっさいには、みみずやプラナリアのように、切っても生きている動物がある。だから zygoon が切っても生きている、また食餌もせず成長もしない例外的な動物だということもありうるけれど「そのことは目下のところ重要ではない」。大事なのは人が新しい概念を与えられたときにどのような期待を持つかということであって、その期待が事実と一致するかどうかではない。

さてボイヤーは、こういった「テンプレート」概念を、宗教現象に見られる「超自然」の概念の機構を説明するために用いた。その説明を以下に見ていくことにしよう。

新たな例外的な（超自然的な）対象の表象を作るためには、それが属する「テンプレート」に、それがどう例外的な（特別な）ものかということを示す「タグ」をつける。このタグには、存在カテゴリーが提供する情報に矛盾する情報が含まれている。

全知の神→｛人物｝＋特殊な認知能力
人のもとを訪れる幽霊→｛人物｝＋物質的な身体の欠如

ゾンビ→{人物}＋認知機能の欠如
憑依された人→{人物}＋自身の発話の制御不能
人の言うことが分かる彫像→{道具}＋認知機能
処女懐胎→{人物}＋特殊な生物学的特徴（以上、pp.72-73より抜粋）

そうすると、下記のような主張を持つ宗教が考えられ、それらは実在するか、もしくは実在しそうな感じを与える。
「神は存在する。神はわれわれの行為をすべて知っている」
「死者の魂はさ迷い、ときに人々のもとを訪れる」
「死してなお徘徊しつづける人がいる。もう話すことができず、自分がなにをしているかも知らない」
「気絶して、妙な話しかたでしゃべりはじめる人がいる。神がその人を「とおして」話しているのだ」
「われわれがこの女性を崇拝するのは、性交を経ずに懐胎したただひとりの存在だからだ」
「われわれがこの彫像に祈るのは、この彫像がわれわれの祈りを聞き、われわれが望みを叶える手助けをしてくれるからだ」（以上、p.60より抜粋）

ここにおいて超自然というものは、既存の存在テンプレートが可能にする無数の推論・期待に、タグをつけた状態になっている。そして、そのときにつけられるタグは必ず「活性化されたカテゴリーについて反直観的な情報を含む」（p.74）。反直観的とはこのばあい、「存在カテゴリーが提供する情報に矛盾する」（p.73）ということだ。要するに、

超自然＝概念のテンプレート＋反直観的タグ

ということになる。

たとえば人間の認知能力では、遠方・過去・未来のこと、遮蔽された対象や他人の心中のことを直接認知することができない。これはカテゴリー｛人物｝のデフォルト（初期設定）条件だ。超自然的な認知、たとえば神の全知、千里眼、テレパシー（読心）、あるいはサイコメトリー[4]は、カテゴリー｛人

物｝によって与えられる「認知能力の限界」にかんする情報に矛盾している、ということになる。

Ⅲ 「反直観的なもの」は必ずしも世界観の修整を求めない

ここでボイヤーは、きわめて重要なことを述べている。反直観的なものが、世界観の修整を求める（読者をためらわせる）とはかぎらないというのだ。

「「反直観的」とは、ここではひとつの専門用語である。それは、不可思議な、説明不能の、奇妙な、例外的な、異様な、といったことを意味しない。ここで言う反直観的なものは、驚くほどのことである必要もない」

「キリスト教徒やイスラーム教徒は、全能の行為者によって見張られている可能性を示唆されるたびにいちいち驚かない。まったくありふれた話だ。しかしこういうった概念は、「存在カテゴリーが提供する情報に矛盾する情報を含んでいる」という、本書で使用する正確な意味で、依然として反直感的なものなのだ」

全知全能の神という概念に親しんでいる文化にとって、その神の特殊な認知能力は、それ自体として驚きの対象とはならないが、それでも「反直観的」なのだ。『旧約聖書』に記述された人と神との直接的な交流には、「反直観的」でありながら身近な存在としての神があらわれている。

さて、こういった超自然的な表象のなかには、一見、統合失調症患者の妄想のような形態をとったものもある。こういったところから、かつては、宗教や民間信仰というものが精神疾患の一種として分類されそうになったこともあった。

また前節で挙げたような超自然の表象は、そのまま、神話や民話のなかに存在している。また、睡眠中に見る夢のなかにも、こういった着想が姿をあらわすことがある。

お伽話における特殊な現象、たとえば「桃太郎」における、川を流れてく

4） 人の「残留思念」を物体や場から読み取る能力。計量心理学（サイコメトリクス）＝心理統計学と紛らわしいので、サイコスコピーという語のほうが曖昧さが少ないが、あまり用いられない。

る巨大な桃と、その桃から生まれた少年であるとか、「シンデレラ」における、南瓜が魔法によって変えられた馬車であるとか、についても、似たようなことが言える。

「桃太郎」のおばあさんや、シンデレラにとっては、そういった存在は「反直観的」であるため、驚きはするかもしれないが、桃から人間が生まれたり、南瓜が馬車になったりするのを見たからといって、彼らの世界観に根本的な修整が加えられるということはない。

古代人や未開人の文化では、できごとを解釈するときに超自然的な（というふうに近代人であるわれわれに感じられる）要因が盛んに引き合いに出されるが、これは近代科学を知らない彼らにとって超自然現象が「当たり前の存在」であるということを意味しない。神や悪霊、妖精といった超自然的な存在は、私たち近代人にとって「反直観的」であるだけではなく、彼ら古代人や未開人にとっても「反直観的」な存在なのだ。

Ⅳ　幻想小説における「反直観的なもの」と世界観修整（ためらい）の可能性

18世紀末以降のいわゆる幻想小説、20世紀以降のファンタジーやホラーといったもの（これらはSFと分類されるもののなかにも無視できない割合で含まれている）、およびその映像的表現（漫画や映画、アニメーション）に登場する超自然的概念――必ず、宗教と同じように、近代科学的な分類学からの逸脱、および自然法則からの逸脱という形をとる――においても、ここまで述べてきたようなモティーフがそのまま受け継がれている。

つまり、幻想小説やファンタジー小説、ホラー小説に登場する超自然は、基本的には、宗教（とりわけ民間信仰）に登場する超自然的概念と、同じようなメカニズムで構成されている。

いわばこれらの非リアリズム文学は、その発想の源を、神話・民話・宗教と同一にしている。それらの作品の中に、一見近代ふうの擬似科学的「説明」（超自然を幻覚やトリックなどの近代科学と両立する自然現象に解体する説

明ではなく、怪物や超能力といった超自然が作中世界にちゃんと存在するという「説明」、いわば近代科学からの逸脱を近代科学風味の言説で説得するタイプの「説明」）がどれだけ含まれていたとしても、そこで擁護される近代科学からの逸脱は、神話や宗教と同じ人間的メンタリティにしっかり根ざしているというわけだ。

そのうえで、ここから振り返って、トドロフが分析したような19世紀流の幻想文学――その民話や神話との相違点――を、改めて定義しなおすと、それはつぎのようなものになるだろう。すなわち19世紀流の幻想小説とは、存在カテゴリーにたいして反直観的な逸脱を起こすものの存在を示唆することによって、現実世界と同じように設定されているように見えた作中世界像に修整の可能性が浮上する、そういう小説である、と。

反直観的タグを作中人物が「異様」視するのが19世紀流幻想小説（とその後継分野としてのモダンホラー）だ。まさにトドロフが『幻想文学論序説』の最終章で、（19世紀流の）幻想小説を総括して、これを「実証主義的な19世紀が持つ後ろめたさ」（Todorov 1970, p. 176）にほかならない、と結論づけていることと平仄が合う。

19世紀流の幻想小説では、視点人物あるいは語り手は、作者が想定する同時代の読者と同じように――もちろん程度の差はあれ――近代的な世界観、近代科学と歴史学に親和する、啓蒙主義以降の世界観を持っている。幽霊や悪魔、妖精や怪物、そして超能力といった「反直観的」な事象は、「反直観的」であることがそのまま近代科学と実証主義的歴史の世界観に矛盾してしまう。

ここで反直観的な事象を前にして、視点人物は、自分がすでに持っている世界観を守ろうとする。だからしばしば防衛機制のように、あるいは「否認」のように、これは夢なのではないか、とか、自分の頭がおかしくなったのではないか、といったためらいの感慨を持つ。あるいは、背後になんらかのトリックがあるのではないかと考える。そういった可能性を探り、それがじっさいに証明されれば、夢オチ小説や幻覚小説、謎解き探偵小説への道が開け、

視点人物の世界観は守られるが、この探偵小説については後述する。

いっぽう、プロスペル・メリメの短篇小説『イールのヴィーナス』（1837）のように、特異な現象が人為で説明できる可能性を視点人物（ここでは語り手）ひとつひとつ排除していって、解釈を宙づりにするにせよ、またモダンホラーのように、じっさいに反直観的な説明を与えるにせよ、「近代科学で説明できない」という事実を近代科学の方法で証明するならば、そのとき超自然が作中世界において実証的に示唆され、あるいは承認されるのだ。

この点で、19世紀流の幻想小説やモダンホラーの土台となっているリアリズム的世界観とは、反直観的なものをほとんど許さない世界観だということができる。19世紀以降の小説家が想定する私たち近代読者は、そういった世界に住んでいる。

V　20世紀非リアリズム小説における「反直観的なもの」

トドロフが規範的幻想小説と区別した20世紀の非リアリズム小説、とりわけ不条理なできごとによって彩られたフランツ・カフカやボリス・ヴィアンの小説については、どうだろうか。

『変身』で、朝起きたときに巨大な虫かなにかに変身してしまっていたということや、『心臓抜き』（1953）で、村の聖職者とボクシングをするために悪魔が姿をあらわしたといったようなことは、その小説の主人公であるグレーゴル・ザムザやジャックモールにとって、やはり〈反直観的〉なことではあるが、そのことが彼らの世界観――自分が住んでいる世界（私たち読者から見れば「作中世界」）とはどういうものであるかという彼らの考え――の修正を検討する（ためらう）などということはない。

これはマジックリアリズムと呼ばれる小説の中のできごとについても、かなりの程度妥当する現象である。ガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』（1967）のなかで、ホセ・アルカディオ・ブエンディアが死んだときに、黄色い小さな花が天からたくさん降ってくる。その現象を、なにか世界観の修整を要求する（ためらわせる）ようなものであるというふうにとら

える作中人物はいない。語り手も、その現象の報告価値を、純粋に美的な側面でのみ強調している。こういった20世紀小説は、『旧約聖書』やお伽話と同様に、視点人物が超自然を前にして世界観の修整（ためらい）を要求されない。

ではこれらの作品と、神話や民話の相違点はどこにあるか。それは作中世界の記述の相がある。20世紀の非リアリズム小説は、広義の19世紀リアリズム小説（幻想小説を含む）へのオルタナティヴとして、自然描写や心理描写といったリアリズムの語りかたを用いることで、読者の期待を小説的リアリズムにいわばチューニングしたうえで、反直観的な事象を作中人物が「異様」視しないことそれ自体が、読者にとって異様なこととなるのだ。

ところで、ここで興味深い境界例がある。カルロス・フエンテスの『テラ・ノストラ』（1975）の冒頭で読者は、パリを流れるセーヌ川が沸騰したということを知らされるが、それはつぎのような文章によってである。

〈三十三日と半日前、セーヌ川の水が沸き立って奇跡的な大災害が起こってもおかしくはなかった。一カ月後、その現象のことを省みるものは一人としてなかった〉（Fuentes 1975, p. 19）

この箇所が特殊なのは、わざわざ〈その現象のことを省みるものは一人としてなかった〉と明言している部分である。『百年の孤独』と違い、作中人物がそのことを省みなかったということをわざわざ明言しているのだ。『テラ・ノストラ』のこの部分はマジックリアリズム的ではあるが、語り手のこの一文には、作中世界の特殊性を説明しようという意図が見られ、結果としてやや自己言及的なニュアンスが生じてしまっている。

VI　反直観的タグと探偵小説・SF

謎解き探偵小説――正確にはそのなかの、島田荘司が名づけた「本格ミステリー」（島田 1989, p. 86）（1995, pp. 53-54）についてはどうだろうか。

島田はそこで「本格ミステリー」を幻想文学に親和するもの、いっぽう「本格推理小説」を一般の（狭義の）リアリズム小説に親和するものと位置

づけ、「本格ミステリー」における謎の幻想性と解明の論理性の落差を強調した。

本稿の用語で言うならば、「本格ミステリー」の冒頭に提示された謎は反直観的な見かけをしており、かつ視点人物や読者に作中世界の世界観――とりわけ物理法則――の修整（ためらい）を要求する。それが論理的解明（あるいはG・K・チェスタトンの《ブラウン神父》もののようなパラドクシカルな直観）によって、作中世界の世界観の修整（ためらい）を要求しないところにまで分解される。

この点で、謎解き小説と多少の共通点を持つのがSF小説である。このばあいは――SFという分野の外延にもよるが――特殊な、つまり（一見）反直観的な状況になんらかの説明が伴う。

SFのばあい（ここではあくまで原理的な可能性を素朴に論じているので、個別の作品の話ではないが）、それ自体は読者に世界観の修整＝ためらいを要求しないはずの既知の科学的概念を組み合わせて説明することによって、結果として反直観的に見えるような状況を外挿することができる。

このようにSFの原理を単純化するならば、17-18世紀の架空旅行記（ユートピア物語）や、18世紀末に登場した未来小説と、19世紀末にジャンルとして成熟していったSFとが、シミュレーション的性格（それ自体は読者に世界観の修整＝ためらいを要求しないはずの既知の科学的概念を組み合わせた説明）と世界観の修整とにおいて地続きであることが納得されるだろう。

シミュレーション的性格と世界観の修整は、読者を促して、その現実世界自体を再検討するように導く。これはトマス・モアの『ユートピア』（1516）以降、ザミャーチンの『われら』（1921執筆）のようなディストピア小説や、アーシュラ・K・ル・グィンの《ハイニッシュ・サイクル》第4作『闇の左手』（1969）などのフェミニズムSF、ジェンダーSFに至る伝統でもある。ダルコ・スーヴィンがSFの要件と見なす「異化」（Suvin 1977）はこれを指

5）　スーヴィンがここで依拠している「異化」概念は、ロシア・フォルマリズムの理論家ヴィクトル・シクロフスキーの「言葉の復活」（Shklovsky 1914）「手法としての芸術」

している[5)]。

世界を形成する既知の情報を組み合わせつつ外挿することによって、「近代科学で説明できない」状況の可能性を近代科学の方法で証明するのは、探偵小説と SF とが共有する潜勢力なのだ。

Ⅶ 幻想小説における超自然を形式化すること

物語文学としての幻想小説の意味論的アプローチには、トドロフの『幻想文学論序説』にはじまる多くの研究文献があり、またマリー＝ロール・ライアン『可能世界・人工知能・物語理論』の第二章（Ryan 1991, ch. 2）にもいくつも重要な指摘が見られる。しかし、これらの幻想文学論の多くは構造主義的な、あるいはフォルマリズム的なアプローチであったため、作中に登場する超自然そのものの構成についてはいわばブラックボックス化し、そこに踏みこんではいなかった。

こういった幻想文学論以前のなかば古典と化した文献、たとえばフロイト、サルトル、ガストン・バシュラールらの人間学的アプローチ（Freud 1919; Sartre 1936 & 1940; Bachelard 1960）やヴォルフガング・カイザーの文芸学的アプローチ（Kayser 1957）もまた、超自然の表象を形式化してはいなかった。

今回参照したボイヤーがおこなっている徹底したモデル化は、人間の想像力がどのように働く傾向を持っているか、という問題に照明を当てるものである。この側面において、この著作が裨益するところはきわめて大きい。

（筆者は関西学院大学商学部教授）

引用文献

Bachelard, Gaston（1960）, *La poétique de la rêverie,* 8e éd., Presses universitaires de France, coll. «Quadrige», 2016.

Boyer, Pascal（2001）, *Religion Explained : The Human Instincts that Fashion Gods, Spirits and*

（1916）を踏まえている。

Ancestors, Vintage, 2002.
Eco, Umberto（1973/1988）『記号論入門　記号概念の歴史と分析』谷口伊兵衛訳、而立書房《教養諸学シリーズ》第3巻、1997。
————（1979）『物語における読者』新版、篠原資明訳、青土社、2011。
————（1984a）『テクストの概念　記号論・意味論。テクスト論への序説』谷口勇訳、而立書房《教養諸学シリーズ》第2巻、1993。
————（1984b）『記号論と言語哲学』谷口勇訳、国文社《ポリロゴス叢書》、1996。
Freud, Sigmund（1919）「不気味なもの」原章二訳『笑い　不気味なもの』所収、平凡社ライブラリー、2016年。
Fuentes, Carlos（1975）『テラ・ノストラ』本田誠二訳、水声社《フィクションの楽しみ》、2016。
Kayser, Wolfgang（1957）『グロテスクなもの　その絵画と文学における表現』竹内豊治訳、法制大学出版局《叢書ウニベルシタス》第3巻、1968。
Ricardou, Jean（1978）, «Le Dispositif osiriaque: Problème de la segmentation. Osiris, ainsi que *Les Corps conducteurs* et *Triptyques* de Claude Simon» in *Nouveaux Problèmes du roman,* Seuil, coll. «Poétique».
Ryan, Marie-Laure（1991）, *Possible Worlds, Artificial Intelligence, and Narrative Theory,* Indiana University Press.
Sartre, Jean-Paul（1936）, *L'Imagination,* 4e éd., Presses universitaires de France, coll. «Quadrige», 1994.
————（1940）, *L'Imaginaire : Psychologie phénoménologique de l'imagination,* Gallimard, coll. «Folio essais», 1986.
島田荘司（1989）「本格ミステリー論」『本格ミステリー宣言』所収、講談社文庫、1993。
————（1995）「ハイブリッド・ヴィーナス論」『本格ミステリー宣言Ⅱ　ハイブリッド・ヴィーナス論』所収、講談社文庫、1998。
Shklovsky, Viktor B.（1914）「言葉の復活」坂倉千鶴訳、桑野隆＋大石雅彦編『フォルマリズム　詩的言語論』所収、国書刊行会《ロシア・アヴァンギャルド》第6巻、1988.
————（1916）「手法としての芸術：松原明訳、同前。
Sperber, Dan and Deidre Wilson（1986/1995）, *Relevance: Communication and Cognition,* 2nd. ed., Blackwell.
Suvin, Darko（1977）, *Pour une poétique de la science-fiction : Études en théorie et en histoire d'un genre littéraire,* Presses de l'Université du Québec, coll. «Genres et discours».
Todorov, Tzvetan（1970）, *Introduction à la littérature fantastique,* Seuil, coll. «Points essais», 1976.